

「よものものがたり」考：『かげろふ日記』覚書

今西，祐一郎

<https://doi.org/10.15017/2559329>

出版情報：文學研究. 97, pp.1-18, 2000-03-31. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

「よものものがたり」考

——『かげろふ日記』覚書——

今 西 祐 一 郎

兼家と結婚してから一五年目の安和元年（九六八）九月、道綱母は年来の宿願であった初瀬詣でに出発する。しかし夫兼家は、翌十月に冷泉天皇即位の大嘗会の御禊を控え、しかもその御禊では「女御代」という大役を時姫腹の娘超子が務めるということになって、道綱母に同道できない。

かくて、年ごろ願あるを、いかで初瀬にと思ひ立つを、立たむ月にと思ふを、さすがに心にしまかせねば、かうじて九月に思ひ立つ。「立たむ月には大嘗会の御禊、これより女御代出で立たるべし。これ過ぐしてもろともにはや」とあれど、わが方のことにしあらねば、しのびて思ひ立ちて、日悪しければ、門出ばかり法性寺の辺にして、あかつきより出で立ちて、午時ばかりに宇治の院にいたり着く。

大嘗会が済んでから一緒に初瀬詣でを、と提案する兼家に対して、道綱母は超子の女御代は自分に関わりがないこ

とだと一蹴して、自分の一存で初瀬へ出かけたのであった。

超子の一件を「わが方のことにしあらねば」と一蹴する道綱母の応対は、一見かなり利己的に感じられる。しかし、時姫腹の超子の任女御代がどういう意味をもっていたかを見れば、道綱母の態度を一概に利己的とのみ断じるわけにもいかないであろう。

もし、「女御代」というものが、

また、女御代というものもあつた。『蜻蛉日記』に「たたん月には、大嘗会の御けい、これより女御代出ださるべし。」とある。これは大嘗会の御禊（大嘗会を行わせられる前に、天皇御被禊をなさること）の儀を行わせられるとき、臨時に女御を選定なされたのである。
(和田英松「官職要解」^(注1))

というだけの役職であつたのなら、道綱母の応対をあんまりだと咎めることもできよう。しかし、「女御代」は、

女御代タル人ハ、御禊ノ後ニ真ノ女御タル者モ多カレド、女御タラザル者モ亦少カラズ。(『古事類苑』帝王部)

と述べられるように、実際の「女御」への階梯であることが多く、時姫腹の超子また然りであつた。

『日本紀略』には、安和元年十月二十六日の大嘗会御禊に先立つ十四日に、

今日、中将兼家女超子入内

また大嘗会の後、十二月七日に、

以従四位下藤原愼子、同超子為女御

という記事が見出される。すなわち、時姫腹の超子は、たんに臨時の「女御代」を務めただけでなく、それを機に冷泉帝の後宮に入内、任女御という栄達の道を歩み始めていたのであった。

とすれば、時姫と張り合う道綱母にとって、それがおもしろからうはずはない。兼家の懇ろな申し入れを「わが方のことにしあらねば」と一蹴して初瀬詣でに出発した背景がそのようなものであったとすれば、道綱母の態度もいかにもと頷かれる。

本稿は、その初瀬への道中に道綱母が目にした、一つの情景についての私見である。

二

さて、兼家の意向を無視して「しのびて思ひ立ちて」、「しのびやかにと思ひて、人あまたもなうて出で立ちたる」旅ではあったが、綱代をしかけ、小舟が上り下りする宇治川の景物をはじめとする道中は、道綱母の心に大きな慰めを与えた。宇治を経て、初日の宿泊は、泉川（木津川）畔の橋寺である。

賢野の池、泉川などいひつつ、鳥どもゐなどしたるも、心にしみてあはれにをかしうおぼゆ。（中略）その泉川もわたらで、橋寺といふところにとまりぬ。

そして翌日の道程のはじめに、

あくれば川わたりて行くに、柴垣しわたしてある家どもを見るに、いづれならん、よものものがたりの家など、思ひ行くに、いとぞあはれなる。

と、「よものものがたりの家」なる物が言及される。この「よものものがたりの家」とは何か。

この「よものものがたり」については、はやく『蜻蛉日記』の注釈に先鞭をつけた契沖によって、「よ」は「か」の字体転訛で、「よものものがたり」は「かものものがたり」であるという見解が示された。

原本ニよもの物語トアリ。契沖本ニよヲかトヨンデ、かもの物語トセリ。サダメテ、サイヘル物語アルニコソ。

〔蜻蛉日記解環〕

もつとも「よものものがたり」という本文は、契沖が書き入れに用いた板本と宮内庁書陵部藏桂宮本にのみ見える語形で、他の諸本はいずれも「かものものがたり」である。

しかし一方では、「よものものがたり」という文字列中の「もの」二字を衍字と見なして削除し、しかも「よもの」の「よ」は、前の「いづれならん」に続けて「いづれならんよ、ものがたり（の家）」と読む『蜻蛉日記解環』の解（注）積（イ）、また「よも」を「四方」と解し、「四方の物語」で、

何処となくあたりが物語に出てくる家を思はせると、空想を馳せつゝ、ゆくと。(喜多義勇「蜻蛉日記講義」)

物語絵などの小柴垣の家などを連想して、どの物語だったかしらとあれこれと一般的に世の中の四方の物語に出てくる家を思い出して行くと。(川口久雄「日本古典文学大系」)

という意に解する解釈(口)も出されたが、桂宮本、板本以外の諸本に見える「かものものがたり」を捨てて「よも」に就くのは、いささか躊躇される。

(注一(イ)(口)の)どちらにしても構文上無理があるうし、「四方の物語」の言い方もおかしい。「よものものがたり」を取るとしても、特定の物語名としなければなるまい。散佚物語を仮定するのだから、「かもの物語」「よもの物語」いずれでも差支えないはずで、あるいは底本(注一桂宮本)の形を尊重するのがよいのかもしれない。しかし「よものものがたり」は底本と版本にしか見られないこと、吉沢・吉川・石川諸氏のいわれるごとく、この近在に「賀茂」の地名があること、以上の二点から判断して、第一類B系本・吉田本に従って「賀茂の物語」を是としたい。「賀茂の物語」に出てくる家はどこなのだろう」の意。(上村悦子「蜻蛉日記解釈大成」)

諸本の本文を勘案する限りでは、この上村説が穏当というべきかもしれない。

では「賀茂の物語」とはどのような物語であったのか。それにつき具体的な考察をはじめて試みた、吉川理吉「かげろふ日記併に同時代の物語共と源氏物語との関係」^(注)は次のように述べる。

かもの物語は散佚物語の名を挙げた従来のものどもにも未だ出てゐない様であるが、本記によるに山城國相楽郡加茂、恭仁宮の近傍に、女主人公が棲つてゐたといふ風なことがあつたものらしい。さればかのからもりなど、同様に大分古いもの、様におもはれる。

また、吉川氏の説を承けて石川徹氏も『古代小説史稿』において、「かげろふ日記のこの条は、丁度、相楽郡を道綱母が通つてゐると思はれる」ことに加え、『山州名跡志』の「法華寺野、一名加茂野」という記載などから、「加茂の物語」の可能性を支持した。

三

ところで、道綱母が泉川を渡り、南都奈良へ向かつて一路南下する牛車の窓から「柴垣しわたしたる家ども」を眺めて、「いづれならん、かもの物語の家」と思ったという一文は、「かもの物語」という物語が、説明するまでもなく周知の作品であつたという気配を濃厚に漂わせている。物語を読むほどの者なら、誰しも先刻御承知といった口吻がこの一文にはある。

しかるに、吉川氏指摘のとおり、「かもの物語」という物語名は「散佚物語の名を挙げた従来のものどもにも未だで」おらず、氏の論文から半世紀以上を経た今日においても事情は変わらない。

平安時代の物語で作品そのものが伝わらずとも、その名だけは知られる例は少なくない。「枕草子」「物語は」の段は、その代表である。

物語は、住吉、うつほ。殿移り。國譲りはにくし。埋もれ木。月待つ女。梅壺の大将。道心すすむる。松が枝。狛野の物語は、古蝙蝠さがし出でてもて行きしが、をかしきなり。物羨みの中将。宰相に子うませて、形見の衣など乞ひたるぞにくき。交野の少将。 (三卷本)

「住吉」、「うつほ」はともかく、以下、今日の我々には馴染みのない物語名が並ぶが、「埋もれ木」、「道心すすむる」は、鎌倉時代の物語歌集『風葉集』にその名と歌を留め、また「狛野の物語」、「交野の少将」は『源氏物語』にもその名が見えて、ある時期まではたしかに存在した物語である。

とすれば道綱母が「いづれならん、かもの物語の家」という言葉を発表するほどの「かもの物語」も、せめてその名称くらいは、同時代あるいは後世の文献に書き留められていてもよかつたはずではないか。もちろん、「枕草子」が書き留めた以外の物語も少なからずあつたことであろう。だから、かつて「かもの物語」という物語があつたという可能性も簡単には否定できない。しかし、そのような条件を考慮してもなお、「かもの物語」にはいくばくかの疑問がつきまとう。

その第一は、「かも」という地名に関してである。泉州を渡つて南下する道綱母の道中近くには、たしかに現在の京都府相楽郡加茂町に含まれる「加茂」の地があつた。そして、すでに見たごとく、それが「かもの物語」説の最大の根拠である。けれども、その最大の（というよりむしろ唯一の）根拠は、同時に「かもの物語」説のおほつかなさの源でもある。

一般に物語名に包摂される地名は、「住吉物語」の住吉、「交野の少将物語」の交野、「狛野の物語」の狛野の例を持ち出すまでもなく、歌枕的な地名が多い。『更級日記』にみえる「せりかは」の芹川（『源氏物語』蜻蛉巻にも見える）、「しらら」の紀伊国白良、同日記巻末に記される「みつのはままつ」の浜松、「あさくら」の朝倉（この場合、

地名が物語の内容とどうかかわるかは不明であるが）なども同様で、むしろそうでないものを捜し出す方がむづかしい。

このような観点に立つとき、「かもの物語」は他とはかなり異質だといわなければならぬ。泉川に接する「かも」は、『和名類聚抄』に「相楽郡賀茂郷」と明記されるものの、詩歌に登場することきわめて稀な地であった。地名に関する古記録、古文獻とならんで詩歌をもふんだんに載せる地誌『山城名勝志』（正徳元年（一七一）刊）においても、賀茂郷については、『萬葉集』卷十一の、

鴨川の後瀬静けく後も逢はむ妹には我は今ならずとも（二四三二）

一首を挙げるにとどまる。賀茂郷を流れる泉川の別名「鴨川」を詠むのは『萬葉集』でもこの一首のみ、他に相楽郡の賀茂を詠んだ歌も見当たらない。しかもこの「かも川」は時に愛宕郡、すなわち今の京都市内を流れる鴨川と見なされたこともあった（『萬葉集古義』）という、紛らわしい例である。^{（注）}

平安時代に入り、そして中世に至っても、相楽郡の賀茂は歌に詠まれることはない。このような、平安時代人に耳遠い「かも」の地名を題名に冠し、そこを舞台とする物語が、はたして多くの読者をもっていたのだろうか。「いづれならん、かもの物語の家」という道綱母の問いを受けとめるには、「かも」という地名はあまりにも弱い。

道綱母の衆人熟知と言わんばかりの口吻にもかかわらず、「かもの物語」の痕跡が後世の文献にまったく見えな

「かも」という地が、他の物語名に冠せられた地名とは違って、文学（和歌）とは非常に疎遠な空間であったと
思う。

この二つに焦点を絞ると、「かもの物語」という物語の存在はかなり危ういものに見える。

ひよつとしたら「かもの物語」という物語は存在しなかったのではないか。といつても道綱母がためを言っているということではもちろんない。「蜻蛉日記」諸本に見られる「かもの物語」が、おそらくは変体仮名の類似から、桂宮本と板本において「よもの物語」に転じていたように、じつは「かもの物語」という物語名そのものも、他の物語名からの誤転によるものだ、という可能性は考えられないであろうか。と、このような無謀な思いつきを記すのは、物語名の誤伝の可能性および舞台が泉川近辺であるという二条件を満たす周知の物語が、かつて存在していたからである。

四

それは、前節に引用した「枕草子」「物語は」の段にも挙げられていた「狛野の物語」である。この物語については、同じ「枕草子」「成信の中將は」の段にも、

こまの物語は、何ばかりをかしきこともなく、言葉もふるめき、見どころおほからぬも、月にむかしを思ひ出でて、虫ばみたる蝙蝠取り出でて「もと見しこまに」といひて、尋ねたるがあらはれるなり。

と、多少くわしい言及が見られ、かなり流布していたらしい状況が窺われる。さらに「源氏物語」蜚巻の、

紫の上も、姫君の御あつらへにことつけて、物語は捨てがたくおぼしたり。こまのの物語の絵にてあるを、「いとよくかきたる絵かな」とて御覽ず。ちひさき女君の何心もなくて昼寝したまへる所を、むかしのありさまおほし出でて、女君は見たまふ。

という一節からは、当時、絵をともなつた「狛野の物語」のあつたことが知られる。それらをもとに、

ただひたぶるに兒めきて柔かにあえかな女性、従つて男の静かな深い愛情を受けるべき女ではあるが、又それだけに若い色好みには時として他の強い刺戟の蔭に忘れがちな女性、男はその女に又の逢ふ瀬を契つて仮初の別れをするが、その後は他の通ひ所に足繁くなり、刺戟のあるはなやかな恋に耽つて、自然かの女の事も忘れ勝ちに数年を経る、それが、過ぎぬる方の哀も人の恋しき事も何がなし思出されるある月明の夜に、かの仄かなりし恋の思出がふと男の記憶の中に甦つてきて、女を訪れたのが契機となつて、再び静かな深い愛情が男の心に湧上つてくるといつたやうな構想であつたのではなからうか、従つてこの女も恐らくこの物語の女主人公であつたらう（尚、狛野の物語なる題名も、この女が狛野に侘居してゐた所からの名でなからうか）。

という、「こまのの物語」の復元（氏はそれを「空想」と卑下しているが）を試みたのは、堀部正三氏であつた（「中古日本文学の研究」「散佚古物語雜記」）。

ただし、「源氏物語」の「こまのの物語」には問題がある。それは「こまのの物語」という本文が、じつは陽明文

庫本や、尾州家本以下の河内本にみられるものであり、今日一般に通行する青表紙本では「くまのの物語」となっているからである。知られるように、日本古典文学大系（岩波書店）、日本古典文学全集（小学館）、新潮日本古典集成など、今日の代表的な校注本は一様に青表紙本を底本として採用し、その結果、蛭巻の当該箇所は揃って「くまのの物語」という本文を示す。

加えて蛭巻のこの部分をめぐっては、次のように「河海抄」が、「かも」でもなく「くまの」でもない「この（物語）」という形を掲げるといふ不可解な面もある。

この物語のゑにてあるを

古物語 ふるき物語也。うつほの物語などをいふ歟。清少納言枕双紙にも此詞あり。又、古万葉集など順集にもかけり。或こまの物語、くまの、物語などかきたる本もある歟。あやまり也。古本皆如此。

けれども、「河海抄」に先立つ「異本紫明抄」に「こまの、物かたりのゑにて有を、いとよくかきたるゑかなとて御らむずる」以下の本文および「こまのとは所の名也」といふ注を記す点は、「こまのの物語」説に有利といふべきか。

一方、「河海抄」を踏まえた二條兼良「花鳥余情」では、

こまの、物かたり

河海抄には此物かたりのゑとあり。古物語といふ心なり。親行本にはこまの、物かたりとかけり。又くまの、物語とかきたる本もあり。それもこまをくまと五音通するによりてなり。今案、こまの、物語は枕草子にも物

「よものものがたり」考

かたりの名に出せり。勝説といふべし。

と、「親行本」すなわち河内本の本文に拠つて「こまの」を採り、異本の「くまの」も五音相通の原理で「こまの」に同じと見なす。『花鳥余情』にいう「くまの、物語とかきたる本」とは、大島本、三条西家本をはじめとする嫡流の青表紙本にほかならないのであるが、「こまの、物語」説の優勢によつて、青表紙本の「くまの」が「こまの」に蚕食されたのであろうか、『孟津抄』では、逆転して「こまの、物語」の方が青表紙本の本文であるという転倒が起こる。

こまの、物かたり

青表紙には如此こまの、を用也。くまの、物語と云説あり。それもこまをくまとは五音通にや。いつれにくまのは用ひず。

それを承けるかのように、近世に入つて続々と出版された『源氏物語』版本、すなわち古活字版、絵入り源氏（承応板）、首書源氏物語、湖月抄などでは、基本的には青表紙本の系統に位置付けられる本文を有しながらも、この箇所はすべて「こまの、物語」となるに至つた。

この現象は、『源氏物語』の本文系統を峻別する本文批判の立場からは、青表紙本の本文への河内本本文の混入と見なされるであろう。しかし、仮名の「こ」と「く」との紛らわしさを考慮すれば、結果的には本来の本文の復元となつてゐる可能性も小さくない。それは、青表紙本の面影を忠実に留めると見なされている大島本を底本とする今日

は必ず「枕草子」の「物語は」の段を掲げて、「くまの、物語」が「こまの、物語」である可能性の示唆を怠らないというところからも窺われるであろう。

五

ということになれば、「蜻蛉日記」の「よもの物語」にも、それがもとは「こまの物語」であったかもしれないという可能性、を考へることができないのではないだろうか。あるいは少なくとも、一度はその可能性について考えてみてもよいのではないか。

もつとも、「よもの」と「こまの」との間に字体転訛を想定することは、「くまの」と「こまの」との場合に比べて困難の度合いが少々高い。しかし流麗、また闊達な平安、鎌倉時代の古筆の仮名字体に思いを致せば、決してありえないことではない。

そしてそのこと以上に注目されるのは、もし「よもの物語」が「こまの物語」であったとした場合の、地理的な適合性である。

「こまの物語」の「こまの」とは、はやくは前節で言及した「異本紫明抄」に、

こまのとは所の名也

と記され、またこれも前掲、堀部氏の論に、

「よものものがたり」考

狛野の物語なる題名も、この女が狛野に侘居してゐた所からの名ではなからうか。

と述べられたように、地名と考えてよい。そして「狛」といえば、「催馬楽」「山城」の「山城の狛のわたりの瓜つくり」、すなわち古来「瓜」の生産であまねく知られた地であった。

三位国章、小さき瓜を扇に置きて、藤原か

ねのりに持たせて、大納言朝光が兵衛佐に

待ちけるとき遣はしたりければ

音に聞くこまのわたりの瓜作りとなりかくなりなる心かな

返し

定めなくなるなる瓜のつら見ても立ちやよりこむこまの好き者

(拾遺集 雑下 五五七・五五八)

「狛」は、たんに瓜の産地として有名だけでなく、これまた「異本紫明抄」が指摘しているように、平安時代中期、「色好み」としてその名を馳せた陽成院一宮元良親王の別荘「狛野の院」の所在地でもあった。

こまの院にて、秋のつとめて人人おきたりけ

るに、みなもとのしたがふがひとりごとにいひ

ける

白露のきえかへりつつよもすがら見れどもあかぬ君が宿かな

といふことを聞こしめして

蓬生の草の庵とすみしかどかくはたしのぶ人もありけり

おなじ院にて、泉川といふことをよませ給

ひける人人「千歳おはしませ」といはひき

こえければ、宮の御

泉川心になふ命あらばなどか千歳も渡らざるべき

又

泉川みづぶかけなる底なれば人なみなみの声ぞきこゆる

〔元良親王集〕一三八―一四一

これらの歌から察するに、「狛野の院」は、泉川を眺望におさめた勝地に位置し、折に触れまだ若年の源順（順は元良親王より二十一歳年下である）をはじめとする歌人も集う、風流で聞こえた別荘であつたらしい。のみならず、同じ「集」の次のような歌からは、「色好み」元良親王をめぐる歌語りの場面であつたようにも見える。

北の方、宮にむしことてさぶらひける、

めしければ、勤事におきたまてけるを、

をとこ宮、こまのの院におはしませ

るに、むしこがたてまつりける

数ならぬ身はただにだにおもほえていかにせよとかながめらるらむ

宮の御返し

「よものものがたり」考

つれづれとながむといふなる人よりもよその時雨はおとらざりけり

女宮うせ給ひにければ、をとこ宮

岸にこそよよをばへしか泉川ことし袂をひたしつるかな

(同 六七―六九)

「こまの」の地は、このように豊かな文芸的背景を有する歌枕であつた。したがつて南都奈良へ、さらには初瀬へと下る平安貴族たち（ことに道綱母のように初めて旅する者）にとつては、「これが、あの狛野の里か」と、無関心に通過することのできない地であつたにちがいない。『公任集』の次の歌なども、その一例といえるであろう。

春日にまうで給ひけるに、煙立つ山里を、

これなん狛野の里と人の聞こえければ

朝まだきあさゐる雲と見えつるは狛野の里の煙なりけり

(四七七)

道綱母が初瀬への途次、泉川を渡つて「柴垣しわたしたる家ども」を眺め、「いづれならん、よ（か）もの物語の家」という言葉を口にしたのは、まさしくそのような狛野の付近においてであつた。とすれば、その場の道綱母の念頭に去来する物語として、「こまの物語」以上にふさわしいどんな物語が他にありえようか。

『蜻蛉日記』注釈の現状は、しかし、依然として「よもの物語」、「かもの物語」の域を出ることがない。いずれを採るにせよ、その解釈が満足のいくものでないことはすでに見たとおりである。

道綱母の発した言葉は、「いづれならん、こまの物語の家」だつたのではないか。

「源氏物語」や「枕草子」に見える「狛野の物語」の記事について考察した堀部正二「散佚古物語雜記」（前掲「中古日本文学の研究」、第四節）では、さらに「紫式部日記」寛弘五年八月二十六日条の、

上よりおる、道に、弁宰相の君の戸口をさしのぞきたれば、昼寝したまへるほどなりけり。萩、紫苑、色くの衣に、濃きがうちめ心ことなるを上に着て、顔は引き入れて、硯の箱にまくらして臥したまへる額つき、いとらうたげにまめかし。絵にかきたる物の姫君の心ちすれば、口おほひを引きやりて、「物語の女の心ちもし給へるかな」といふに、見あげて、「物ぐるほしの御さまや。寝たる人を心なくおどろかす物か」とて、すこし起きあがり給へる顔の、うち赤みたまへるなど、こまかにをかしうこそ侍りしか。

という、同僚女房、宰相の君の昼寝姿を記した一節につき、そこに見える「絵にかきたる物の姫君」、「物語の女」が、「源氏物語」蜚巻に「ちひさき女君の何心もなくて昼寝したまへる所」と述べられていた「こまの物語」を念頭に置いたものである可能性が指摘されていた。のみならず常夏巻の雲井雁のうたたねの場面、若紫巻の幼き日の紫上の昼寝の場面などと「狛野の物語」との関連を想定して、「源氏物語」における「狛野の物語」の投影に言及した。

後者については、近時、辛島正雄「蝙蝠と駒と昼寝の物語―散佚「こまの物語」をめぐる断章―」において、詳細を尽くした考察が試みられているが、その考察の結果は、「狛野の物語」が「源氏物語」前後の時代にいかに大きな影響力をもっていたかを、あらためて印象付けるものであった。この点からも、「蜻蛉日記」において言及される

物語の最右翼として「狛野の物語」を想定することができる。

もつとも、仮にそうであったとしても、「蜻蛉日記」によつてもたらされる「狛野の物語」についての新たな情報はたいしたものではない。

これまでに「枕草子」から、男主人公（と考えてよいであろう）が、「虫ばみたる蝙蝠」を取り出して「もと見し駒に」という歌を口ずさみながら女を尋ねて行く、という粗筋の断片が知られていたことはすでに述べた（前々節）。「蜻蛉日記」によつて追加されるのは、その尋ねる行く先が題号から当然予想されることではあるが「狛野」の地であるということ、加えてそれが「柴垣をしわたしたる家」であつたということにとどまつて、もとより「狛野の物語」の全貌復元にはほど遠い。

けれども、もし以上の考察が是とされるならば、私たちは平安朝散佚物語中の佳品「狛野の物語」の熱心な読者をあらたに一人発掘したことになる、この物語の盛んな流布の証を一例追加することにはなるであらう。

注

- (1) 講談社学術文庫による。
- (2) 按二、よもの物語ハ、ものト云コト一ツ衍ニテ、よハ上ニ付テ、何れならんよトハ何レノ物語ニカ柴垣ノ家ノサマ書タルガ、今見ルサマナリシヲ思出タル意ナルベシ。加茂物語ト云コト掬ナキガゴトシ。
- (3) 「國語國文」七卷九号（昭和二十年九月）
- (4) 「歌枕名寄」も、この歌を相楽郡にあたる山城国三ではなく、愛宕郡にあたる山城国一賀茂篇に載せる。なおこの歌が泉川（木津川）の一名としての鴨川であることについては、奥野健治「萬葉山代志考」（大八洲出版、昭和二十一年）に詳しい。
- (5) 紫式部学会編「源氏物語とその前後 研究と資料」古代文学論叢第十四輯（武蔵野書院、平成九年）所収。